くりかえす想い

九条

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
くりかえす想い

【Ｎコード】
Ｎ２３１１Ｊ

【作者名】
九条

【あらすじ】
サキ、君は今日も笑いかけてくる。だがそれは４年前に失われたもので――

Ｍｉｎｄｂａｃｋ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ　－－－５６２　ｔｒｕｅ

ドアを開けると馴染みのカウベルの音が響く。
「いらっしゃいませ、レキ！」
丸木作りの店内まだ開店前の喫茶店、テーブルを拭いていた少女――サキが弾むようような声で迎えてくれる。
歳の割に小さい体の上にのった童顔、笑うたびに短くまとめた外はねの髪が揺れる。
「タマゴサンド、コーヒー」
いつものようにカウンター席に座りながら朝食をオーダーする。
「あ、はーい」
まだ開店時間前だが、父親同士が幼馴染であることもあり、サキの練習もかねて朝食をここで貰っている。
注文を受けたサキはキッチンに消えると手早くオーダーをそろえ、カウンターごしにトレーを置く。
「じゃあ、準備してくるね！」
エプロンを脱ぎ捨て、登校の準備するためドタドタと2階の自室へと駆け上がっていく。

「五瀬ユキ」
レキが知り合いの名前を読み上げる。
夕方の空き教室、部屋の中にいるのはサキとレキの二人だけだ。
「七菅ネイ」
「上月マキナ」

背中を向けたサキの首筋から伸びたコードは、レキの膝の上に置かれたノートＰＣに接続されている。
「倉笹セリナ」
「戸越マナ」
名前が読み上げられるたびにモニターの数値が変動する。
「狩塚ヒジリ」
「……？カイ……比神サキ」
危険領域であるＬＰＣ１の該当人物に差しかかると急激に閾値に近づく。
「……御鎚レキ」
ピーという警告音と共に、パラメーターが閾値を超えたこと示す赤に染まる。
だが、先ほどまでの反応と違いＬＰＣ１ではなくＬＰＣ３の領域だ。
「リン、ＬＰＣ３の記憶のプライオリティーを解除、Ｌ値をあと３００下げろ」
「はい、マスター」
サキと同じ声で、サキとは似ても似つかない冷たい返事が返る。
もう一度全体のシステムをチェックし。問題がない事を確認する。
「今日の調整はここまで、情報の不整合部分を洗い出して問題がある場合は報告」
「はい」
ＰＣをシャットダウンして調整デバイスを片づけていると、ふと視線に気づく。サキが首筋のコードを外しこちらを見つめていた。
何かあるのかと目で問いかけるが、じっと俺を見つめた後、無言で教室を出ていく。
視線の主がいなくなった後も、一人になった夕方の教室は咎めるような重さに満ちていた。

「レキ！」
昼休み、体育館前までジャンケンに負け、3人分の飲み物を買いに行った帰り。教室の前で聞きなれた声に呼び止められる。
「はい、今日のお弁当」
目の前に現れたサキに両手で目の前に弁当の包みを押し付けられる。
「……ん、ありがとう」
紙パックのジュースを左手に持ち替え、やや大きめの弁当箱を受け取る。
いつもなら弁当を渡した後は「ばいばーい」といって疾風のように走り去るのだが、今日はその場に留まり、ほのかに頬が赤く染め、なにか言いたげにこちらの様子をチラチラと伺っている。
やがで、躊躇いがちに言葉を紡ぐ。
「……あ、レキさぁ……今日は、一緒に」
「今日も、ヒジリ達と約束してるから」
「……あ、そっか」
サキは一瞬だけしゅんとした表情を見せるが、再びニコッと笑みを浮かべる。
「それじゃ、ばいばーい」
「ああ」
手を振りながら立ち去っていくサキ。
「一緒に食えば良かったのに」
手元から微糖コーヒーが抜き取られる。
「ああ、俺達は全く気にしないが」
今度はフルーツ牛乳が抜き取られる。
活発な雰囲気と、憂鬱そうな雰囲気、対局の雰囲気の声がかけられる、クラスメイトの狩塚ヒジリと上月マキナだ。
「そういう問題じゃ無い」
「じゃあ、どういう問題なんだ？」

ヒジリが反射的に聞き返してくる、マキナは既に興味を失ったようでさっさと教室に引き上げている。
「……さぁ」
ヒジリの問いを受け流し、マキナの後を追う。ヒジリもそれ以上つっこんではこない。

二人しかいない夕方の空き教室、メンテナンス用ＰＣに表示されるモニター値を眺めレキは眉をしかめる。
「リン、ＬＰＣ３の記憶のプライオリティーを解除、Ｌ値をあと３００下げろ」
「……」
モニターの数値は変動しない。
「……リン？」
呼び掛けるが反応は無し、聞こえてはいるのだろう寂しげにうつむき、頑なに顔をそむけている。
仕方なくキーを叩き、状態を命令待ち受け状態に移行する。
「リン、Ｌ値を――――」
「…です」
再度命令を下そうとしたその時、サキが小さな呟きをしぼりだす。
「リン？」
「嫌です！！」
泣きそうな、切なそうな表情で振り返り叫ぶ。
「――――なぜ、この感情を封じなければいけないんですか？」
サキの涙に濡れた瞳を直視することができず、苦々しい感情を押し殺しながら思い口を開く。
「……それは、特定人物に対しての依存は、一存在としての存在意義を――――」
「これが沙希さんの感情だからですか？」

「……」
「マスター！　私、本当に貴方のことが――――」

ドアを開けると馴染みのカウベルの音が響く。
「いらっしゃいませ、レキ！」
丸木作りの店内まだ開店前の喫茶店、テーブルを拭いていたサキが弾むようような声で迎えてくれる。
「クラブサンド、水」
いつものようにカウンター席に座りながら朝食をオーダーする。
「あ、はーい」
注文を受けたサキはキッチンに消えると手早くオーダーをそろえ、カウンターごしにトレーを置く。
「じゃあ、準備してくるね！」
エプロンを脱ぎ捨て、ドタドタと2階の自室へ急ぐ幼馴染に、片手をあげる。

Ｍｉｎｄｂａｃｋ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ　――５６２　ｔｒｕｅ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2311j/

くりかえす想い

2010年10月8日15時10分発行